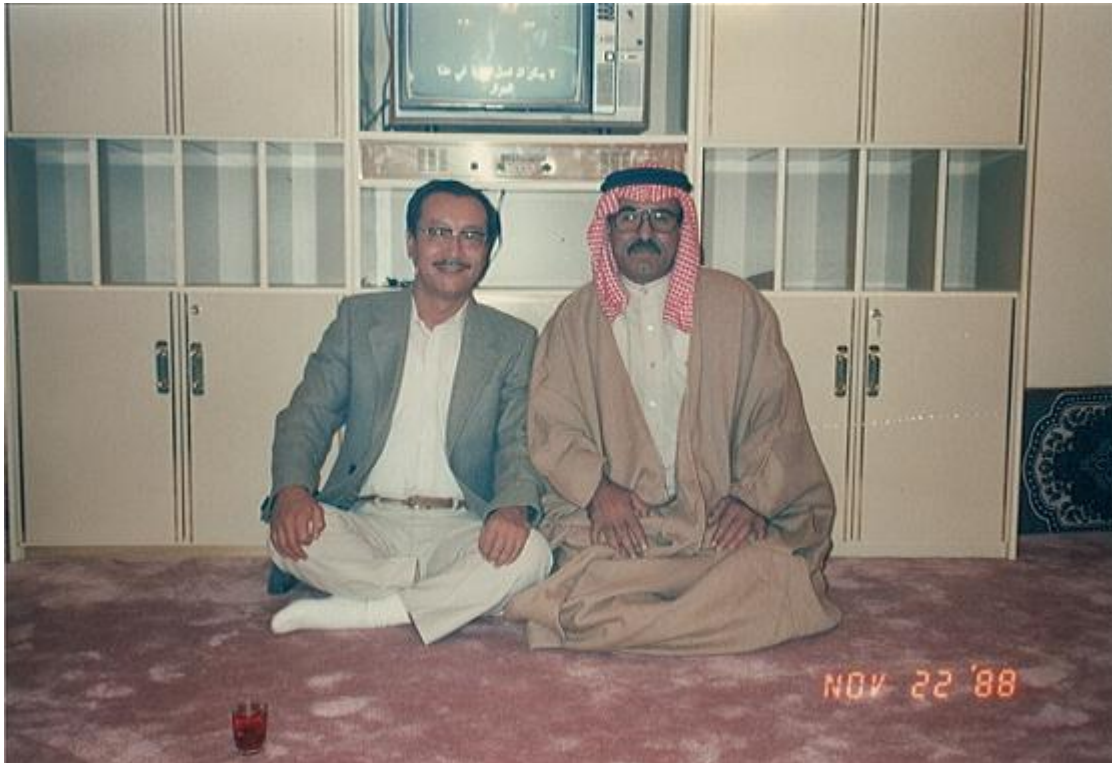


『砂漠の国の柔道場』『第八話』信頼関係は民族を超えた・Abu-Eyad

岡本文夫 （元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）



アブ・イヤド邸には度々お招き頂いたものだった



東京の我が家でのイヤド（北海道工業大学）の卒業祝い
ハッサンとリヤド（両君とも日大）もお祝いに来てくれました

アラブ社会では、本名で名前を呼びかけるのは他人行儀とされ、信頼関係の表し方として長男の名前の前に『Abu (アブ) {父}』と付けて呼び合う。長男の名前が『Eyad』であれば、『Abu Eyad (アブ・イヤド) {イヤドの親父}』と呼ぶ。つまり、あなたの一家のことは、そこまで大切に思っているという意思表示であり、一朝有事でもあれば放っておかないぞという深い関係を意味している。因みに、母親の場合は『Umn Eyad (ウンム・イヤド) {イヤドの母}』と呼ばれる。従って、親交を結ぶに到ったアラブの友人たちは、筆者のことを『Abu Eiichirou(英一郎の親父)』と呼んでくれた。

さて、そのアブ・イヤド氏だが、本名は Mr.Mohammad Al Subei という石油省の高官だった。二回目のカフジ勤務と同時に岡本道場は再開したのだが、弟子の中にイブラヒムという俊敏な少年がいて、彼がアブ・イヤドの次男だった。

息子に対する柔道指導を感謝してくれた彼は、時々筆者を自邸に招待してくれた。政府高官居住区の目の前は直ぐアラビア湾となっており、日本人は魚が好物だろうと、イブラヒムは釣りをしてくれていた。アブ・イヤドは、これを塩焼きにして供して筆者を喜ばせてくれた。

テレビ（放映局は一応二つあるのだが）など見ないカフジの夜長を、お互いの人生の故事来歴を開陳し合って楽しく過ごすことが出来たものだった。

アブ・イヤドから頼まれたのは、アラビア石油のスカラシップで北海道工業大学に留学中の長男イヤドのことだった。長期休暇で一時帰国した時や本社帰任した際には、長男の事をよろしく面倒見て欲しいとのことだ。「Why not !」ではないか。

元々、筆者はアラブ人留学生とは縁が深かった。学生を日本に連れて行く前に、日本人教師がカフジに来て半年間オリエンテーションするのだが、『What is Japan ?』を教えるために、筆者は協力を求められるのが常だった。カフジ地区のガバナー (Amir) に次ぐ NO.2 の存在である裁判官の長男ハッサンのオリエンテーションでは、日本人の家庭はどんなものかと教えるために、カフジの社宅へ招待した。また、彼が日大へ留学した頃、筆者も本社帰任していたので、里親的な拙宅へ遊びに来てくれて、長男の遊び相手になってくれたものだった。

オリエンテーションの一助として、日本人教師が留学生たちを筆者の柔道場へ入門させるのもルーチンとなっていた。しかし、残念ながら彼らの中で長続きした学生はいなかった。理由を訪ねたら、思わず笑ってしまった。弟子として定着している少年や子供たちは、「icbi (一)」から「jyuu (十)」までの掛け声を間違いなく言えるのに、学生たちがトンチンカンな掛け声を掛けるものだから、からかわれて馬鹿にされるからだという (笑)。

それでも、当時、柔道の初歩を教えたイスカンダールなどは、大東文化大学で学んだ後に外交官として駐日サウディアラビア大使館員となり、筆者の二度目の本社帰任の際の総務部任務にはいろいろと便宜をはかってくれたものだ。

脱線ついでに、笑い話をひとつ。イスカンダーは筆者の趣味を承知してくれており、釣りに招待してくれるという。ブルーナンバーの大使館車 2 台が向かった先は、横浜の本牧埠頭だった、

「おい、ここは侵入禁止のコンテナヤードじゃないか！」

「Sensei, No Problem. 僕たち、日本語解らなーい。Sensei もサウジ人に化けていて下さい」。

勿論、警備員数名がすっ飛んできて、退去を命じるのだが、対話が成立しない。

車は外交ナンバーだし、警備員は諦めてイスカンダールたちの居座りを見過ごさざるを得なかった。現地帰りの筆者はまだ日焼けしていたしヒゲは定着していたので、片言のアラビア語を喋っていればよかった。通常は釣り禁止エリアだけに、カサゴの豊漁だった。頭の大きな魚を食べない彼らは、釣果を全部プレゼントしてくれたので、それから数日に渡って煮つけやアラ汁を堪能することが出来た。(笑)

さて、北海道工業大学へ留学中の長男イヤドくん。拙宅へ招待してカフジの家族の近況を伝えたり、女房の手料理をご馳走したりしたのだが、感心なことに北海道名産の大きな夕張メロンをお土産に持参してくれた。勿論、我が長男も可愛がってくれた。筆者のカフジでの活動を紹介するために、行政当局の依頼によるカフジ最大のイベントであるカフジマラソン会場での柔道デモンストラレーションのアルバムを見せたところ、イヤド曰く。「ああ、これ僕ですよ」。カフジ最大の行事を盛上げるために、馬術クラブにも動員がかかっており、グラウンド内周をサラブレッドに行進させていた。柔道デモはその内側のグラウンド真ん中で行っていたのだが、行進の騎手を務めていたイヤドも、当然筆者の活動を横目で確認してくれていた訳だ。新たな接点を確認して、話題が大いに盛り上がったことは言うまでもない。

北海道に戻ったイヤドからは、招待への感謝を表明する丁寧なメッセージを添えた郵送物が届けられた。中身は、日本モスLEM協会刊行の『日亜対訳 注解 聖コーラン』の大著だった。サウジ人が感謝を表すための最高の贈り物ではないか。

勿論、イヤドからの心尽くしの贈り物は現在も筆者の書架の中心を飾っている。

では、アブ・イヤド一家のこの心憎いほどの気配りや礼儀正しさはどこから来るのだろう。カフジの夜長を語り合った依って来たる人生談義に寄れば、元々アブ・イヤドは隣国カタールの王族の一員だったとのことだ。ところが、王位継承を巡る骨肉の争いに巻き込まれ生命の危険を感じた母親は、幼いアブ・イヤドを連れてカタール半島の対岸に位置するサウディアラビアの漁村カティーフに逃れ、アブ・イヤドはその逃避地で成人した。

まるで、平家の刺殺から逃れるために幼い源義経を連れて大和に逃れた常盤御前のドラマに酷似するではないか。アブ・イヤドが経験した辛酸や苦労が、彼の思いやり深い誠実な人柄を育んだのではないかと推察出来る。直接の業務上の関係はないにも拘わらず、筆者が統括する SHIPPING 事務所のスタッフ全員からもアブ・イヤドは尊敬

されていた事実が、彼の人徳が遍く理解されていた証である。

親しく交流したとは言え、彼との実務上の関係は全くなかった。しかし、一度だけ大変痛快な思いとともに助けられたことがあった。

カフジの鉱業所には日量 3 万バーレルの小規模製油所が設置されており、来航タンカー用燃料や現地の造水プラントへの重油供給やコーストガードの舟艇へのディーゼル油供給のために 4 種類の石油製品生産を行っていた。

日本企業とはいっても、鉱業所の操業は石油省の厳格な管理下にあった。各種タブーの中でも原油や石油製品の漏洩事故には最も厳しいペナルティが課されていた。

筆者の業務責任範囲は、来航タンカーへの原油積み出しだけではなく、こうしたローカルサプライも含んでいた。老朽化したディーゼル油のパイプラインに漏洩の予兆が見て取れたので、パイプラインの引き直しが必要と判断された時のことである。

プロジェクト・エンジニアリング部に設計図面を引かせて、筆者がカバリングの申請書を作成して石油省の工事許可を得ようとした。石油省の担当部長は申請書を手渡すと、一瞥もくれることなく、「フンッ！」と言って床に放り投げたではないか。

何たる無礼！（怒）許可を得たかったら、何か持って来いという典型的アラブ式駆け引きだ。筆者自身の利益を図ろうとする訳でもなく、石油省の指示通り安全な石油操業を図ろうとする行動に対して、あるべき態度ではない。しかし、悔しいかな許認可権限は絶対的に相手側にある。ここで難しいのは、投げ捨てられた申請書類を慌てて拾い集めるのは、精神的に完全に風下に立つことになる。筆者は内心の激怒を押さえて、ワン・ジョークを振った。

「ワオッ、投げるのうまい！アメリカ留学中に野球でもやってたの。ハハハ」。

『テメエ！今に見てやがれ！』。筆者は直ちにアブ・イヤドの事務所に向かった。

「おや？珍しいじゃないですか、ミスター岡本。今日はどうされましたか（笑）」

自邸には度々お邪魔しているにも拘わらず、事務所を訪ねるのはこれが初めてだった。ことの顛末の説明を受けたアブ・イヤドは、瞬時に激怒を共有してくれた。

受話器を取ると、「ワワワッ！」と怒鳴りつけた。アラビア語の中身は皆目解らなかったが、岡本を舐めるとタダじゃおかん！くらいの抗議だったと推察した。

「OK, ミスター岡本。話は済みました。もう一度行ってみてください」。

部長は揉み手しながらお愛想笑いで迎えてくれ、その豹変ぶりには笑ってしまった。

「ミスターもお人が悪い。なんで最初にアブ・イヤドの知り合いだと言ってくれなかったんですか」。

石油省内部の職制についてはよく解らないのだが、なにしろアブ・イヤドは偉いのだ。おかげで、ディーゼル油ラインの漏洩事故は未然に回避することができた。

アブ・イヤドは茶目っ気たっぷりの性格だった。

1991 年 1 月 17 日の湾岸戦争勃発に先立つ半年間は『湾岸危機』と称される恐怖に満ちた期間だった。サダム・フセインの理不尽かつ突然のクウェイト侵攻に対して米国

を中心とした多国籍軍が結成されイラク軍の即時撤退を要求した。この一連の流れの中で、クウェイト国境に隣接したカフジ地区の守備のためにはカタール軍とセネガル軍が配備された。一度、移動中のセネガル軍を目撃したのだが、隊列を組むのは苦手なのか、規律と覇気が感じられず、本当にセネガル軍が役に立つのかとの疑問が湧いてきたものだ。

湾岸危機突入後の1か月くらい過ぎた頃だったろうか、アブ・イヤドから呼び出し電話があり、従弟が来ているから顔を出さないかとお誘いだった。

毎度のことなので、気楽に訪問した筆者は驚愕した。アブ・イヤド邸の前には重戦車が一輛止まっているではないか。政府高官居住区に戦車が出入りすること自体が尋常ではない

邸内には4人の軍人がおり、ボスはスツールにもたれたまま鋭い視線を送ってきたが、部下の3名はバツと立ち上がって警戒姿勢をとった。

「いや、いいんだ、いいんだ。日本人の友人を紹介したくて呼んだんだ」。

アブ・イヤドは笑顔でとりなしてくれた。紹介された従弟とは、多国籍軍の一員となったカタール軍の司令官だった。お互いを驚かせる出会いは、アブ・イヤド一流のいたずらだったのだ。軍司令官に対して年長者として話すアブ・イヤドは、彼が王族の一員だったと称するのがハツタリではないことが見て取れた。

筆者は、司令官が腰に装備している拳銃が気になった。将軍である証拠に装備も立派である。拳銃は、かつてのドイツ軍の名銃・ルガーに似ていた。

「将軍。ちょっとその拳銃をさわらせてくれませんか」。

この俺様に向かって何を抜かすか、無礼者！と、ムツとする司令官に、アブ・イヤドがとりなしてくれた。

「いいじゃないか。この日本人は、格別な友人なので、ちょっと触らせてあげてくれ」。

『仕方ないなあ』という風情で、将軍は引き金脇のボタンを押して弾倉カートリッジを抜き抜き、遊底をガチャガチャとスライドさせて弾丸が装填されてないことを確認すると、「ホイッ」と愛銃を手渡ししてくれた。

『機能美だなあ！』ズッシリとした手応えとともに、武器に備わった凄みと美しさを味わうことが出来た。

司令官を見ていると、通常通りに軍用ジープに乗らず、何故重戦車で来たのかという理由が解った。敬愛する兄貴分に立派な将軍に出世したことを悪戯っぽく報告したかったからだろう。筆者は筆者で、将軍の拳銃を鑑賞できたし、部下が三名アテンドして来たことからして、重戦車の操縦員は3名らしいことも観察できた。

結果的には、湾岸戦争勃発の3日前のこと。アブ・イヤドから話があるから来るようにと連絡があった。そこにいたのは、いつものこやかな彼ではなかった。

その日、妻も次男のイブラヒムも国内の安全圏リヤドまで退避させたとのことだ。

筆者が最後の最後まで自分の任務を守ることを知っているアブ・イヤドは、2丁の拳銃を出して、こう薦めてくれた。

「ミスター・岡本も武装しておく必要がある。2丁あるから、気に入った方を持って行ってくれ」。

この破格の好意には本当に驚愕した。実は、日本人と違って、サウジ人は全員武器を所持している。神経質な男なら、自動車のダッシュボードの中に常備しているという。そこまで心配してくれている友情には心から感謝するのだが、外国人の武装は絶対的タブーであり、むしろ禁令違反の罪科の方がもっと危険と言える。そう回答して、格別のご好意は辞退することにした。

「そうか・・・」。

対話の意味は、もっと深かったのかもしれない。石油省高官であるとともに、カタール軍司令官とも親戚であるアブ・イヤドのことだから、我々外国人と違って情報の中枢に接している。開戦が間近かに迫ったことを知ったに違いない。しかし、深い深い信頼関係にあるとはいえ、外国人である筆者に誰からどんな情報を得たなどとは絶対に言えないから、「武装しろ」という表現に、言外の言を託したのだろう。

『任務全うも大切だが、死んだらどうする。ミスター・オカモトも逃げろ！』

現在は、Face Book などという便利な情報交換できるツールに恵まれている。

「Sensei Okamoto はどうしておられるのか？」という関心から、筆者を探してくれていた弟子たちは沢山いてくれたようだ。最初に筆者との交信に成功したのは、現在は米国の住人となったパレスチナ人のラエッドだった。彼ら独自のネットワークがあるから、情報は直ちに横に広がった。現在、F B で繋がっているカフジ時代以来の知人は30人以上を数える。

Eyad とは、別の流れで交信するようになった。現在は、世界最大の産油会社 Saudi Aramco の幹部社員として健闘している。元気な息子にも恵まれて幸せな家庭も築いたようだ。交信の都度、Abu Eyad に宜しくと伝言するのだが、本人はパソコンが苦手のように、残念ながら直接のメッセージを受け取ったことはない。

この5月に、Eyad から Abu Eyad がリヤドの自宅で逝去したとの悲しいメッセージを受け取った。その瞬間、今回ここに記述した全ての思い出が走馬灯のように脳裏を駆け巡った。筆者は、カフジでの Abu Eyad との邂逅に心から感謝するし、今回のエッセイを天国の彼に捧げたい。Abu Eyad の霊よ安らかなれ。本当に誠意溢れる友情を尽くして頂いて有難うございました。



青年の弟子には厳しく指導



若い弟子には優しく指導



おかもと・ふみお

1947 年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田吉隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013 年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」（財界研究所刊）を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段（クウェート国柔道連盟七段）。

To be continued